



Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」
Citation	, 70, 1[838]-24[861]
Issue Date	1986-10-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66544
Type	periodical
File Information	yuin70.pdf



[Instructions for use](#)



目 次

○図書館とネットワーク 応用電気研 三木信弘… 1	昭和61年度北海道地区図書館電算化実地
○海外研究機関での図書館を利用して	研修を終えて (佐藤貞司)……………12
触媒研 国松敬二… 4	第13回医学図書館員セミナー……………13
○1987年 IFLA 大会はブライトンです	○昭和60年度各種統計……………14
教育学部 午来信子… 6	○「附属図書館利用規程」を制定……………19
○会 議…………… 8	○電算化ニュース……………21
○研 修……………10	○受 贈 図 書……………24
昭和61年度大学図書館職員長期研修に参加	○人 事 往 来……………24
して (佐藤清一)……………11	

図 書 館 と ネット ワ ーク

応用電気研究所助教授 三 木 信 弘

本年4月より図書館にコンピュータが導入され、図書の購入受け入れに関する事務処理をはじめ、図書の所在情報の検索が可能となるシステムづくりが始まった。書名や著者名、あるいはキーワードをインプットすれば、たちどころに、該当する本や雑誌が学内のどこに有るのかが判ると云うのは、確かに便利である。しかし、今は残念ながら書籍情報のデータベースが新規購入図書より入力されているため、検索しても求める情報が得られない場合も多い。データベースづくりの作業に当たっている図書館関係者の御努力は、大変なものであり、2~3年は、システムが安定するまで利用者も関係者もガマンを強いられそうである。図書館業務の一部の電算化が始まった訳だが、この事は、図書館がそう遠くない将来に、かなりの部分に於いて、書籍情報や書籍そのものが電子的にファイル化されるための第一歩であると言えよう。その意味で、今年のコンピュータ導入は、北大図書館にとって歴史的出来事として記憶されるだろう。

約15年前の日本の大学には、限られた所にしかコンピュータは未だ使われていなかったが、今やどの講座にも15年前のコンピュータより遥かに強力な能力をもつパソコンがある。この20年間にコンピュータの記憶容量や計算速度などのパフォーマンスは、1,000倍以上になったが、大きさや価格は、1,000分の1にもなってしまったのである。この先15年を考えると

21世紀であり、21世紀はすぐそこまで来たと云う感じである。これからも、コンピュータはさらに性能のアップが計られるだろうし、特にソフトウェア技術を通して、専門的知識の無い人でも楽に使いこなせる日も間もなくやって来るだろう。ハードウェア価格は、超LSI技術により、更に安くなるが、性能は大幅に上昇することになる。この変化の度合いが、10年位で1~2ケタの変化を及ぼすと、コンピュータの使い方そのものに変化を及ぼすことになる。価格や性能の変化が、例えば単に10% down/upしたのであるなら、ユーザの使い方に変化はなく、ただ単に効率がそれだけ上がったと云う話である。しかし、ケタの単位で価格が低下し、性能が上昇したとなれば、今まで使えなかった仕事に使えるようになる分野が必ず出現してくるため、使い方そのものに変化が生じてしまうのである。つまり、量の変化が指数関数的な大幅な変化として現れる時、質的变化としての現象が生じてしまうのである。

コンピュータ技術の開発や利用に拘わる人が、時として見通しを誤るのは、多くの場合現状の傾向を分析し、トレンドでものを考えてしまうからである。トレンド的思考パターンでは「今の状態が量的にどれだけ拡大するか」という見方しかできないから、質的变化の前兆があるのに、それを見落としてしまうのである。一つの見間違いの例は、現在のようにパソコンやワークステーションという立派なコンピュータが、これほどまでに普及し、情報の処理が分散的な形態をとりつつも、それを相互に結び付けるシステム（分散方式）が出現するとは多くの人々が思わなかったことである。コンピュータ・ネットワークと言った場合、少なくともパソコンが出現する以前は、大型コンピュータのセンター間の相互通信位の意味しかなかった。しかし、現在ではコンピュータ・ネットワークは、コンピュータ・ネットワーク・アーキテクチャ（CNA）としての意味をもつまでに至ったのである。CNAとは、ネットワークに種々のコンピュータや記憶システム、あるいは入出力システムが様々なかたちで結合されているが、一つのシステムのように見える（大型コンピュータ・システムがそれぞれの機能をもった装置を複雑に結合して、恰も一大システムとして働くのと似ている）ものである。

コンピュータが非常に高価であった時代には、1台の中央処理装置に出来る限りの装置を結合し、タコ足のように多数の端末がぶら下がる集中方式（中央集権型）を取らざるをえなかった。しかし、現在に於いては、CNAによって網状のシステムによる分散型方式が取れるようになった。集中方式は、情報を1個所に集める方式であるため、巨大な情報を集め、これを端末から検索するデータ・ベースの利用には最も適した方式のように見えるが、はたしてそうであろうか？ センターと端末間の通信コストがゼロに近ければ成り立つが、もしそうでなければ、可搬記憶媒体（磁気テープ、磁気ディスク、レーザー・ディスク等）の容量/価格は今後も著しく上昇すると考えると、多数のサブセンターを作り、その間でデータ・ベースをコピーして定期的に郵送し合った方が安上がりの場合もある。もう一つ大切な事は、天災、人災を含め、万が一の情報破壊に対する再生コストである。情報を集中管理すればするほど、再生コストは気の遠くなるような数字になるのは明らかであろう。機械というものを、絶対に故障させまいとして、ありとあらゆる努力をするより、本来機械というものは、故障するものだと云う前提に立って、また人間は本来誤りを犯すものだと云う前提に立って、コストを計算しておく必要がある。情報処理システムに関して、絶対と云うものは禁物である。

分散方式を押し進めてゆく中で、最近注目されているのが LAN (Local Area Network) であり、CNA を実現する為に必要なものである。LAN に於ける locality とは何だろうか。Network を構成し、そのシステムを統一のとれた一つのシステム (CNA) として動作させるには、どうしても一つの構成方式に統一する必要がある。それぞれ異なる方式に基づいて設計さ

れたコンピュータを結合して、一つの統一のとれたCNAにしようとする事は、バカげた事だからである。しかし、世の中には様々な設計思想によるコンピュータが存在している。それは、情報処理の目的や対象を限定した時、それに最適なシステムを考えてゆくと、それぞれ異なった設計をせざるをえない事によっている。従って、大切な事はシステムを利用する人々の仕事のlocalityであって、単に物理的な距離としてのものでない。本来、ネットワークと云うのは、人と人との結びつきや関係によって出来上がるのだから、この視点から本学のLANをどうするかを考えてゆきたい。

一つの研究室(研究グループ)の仕事を考えてみると、一つの研究分野と云う共通の話題によって結びつき、種々の情報資源(集積された文献、データ及び研究のノウハウ)や実験設備を共有している。研究スタッフは、勿論物理的に近い場所に集まり仕事をしているが、これは情報資源や実験設備という共有資源をお互いに利用するのに便利だからであって、物理的に離れた場所においても仕事が出来する方法が見いだされるならば、空間という制約から逃れ、仕事をする部分もかなりあるにちがいない。研究グループにとって、最も重要なものは、共有資源に基づく仕事のlocalityであり、人間関係である。だから、一つの研究グループを対象とした仕事のコンピュータ化と相互通信の電子化の為のLANとCNAの設計は、容易であり統一的構成が可能である。しかし、これが複数の研究グループの為だとすると、話は別になる。大学全体の講座間、学科間、そして学部間の相互の情報交換を考えると、それは前述の研究グループ内の形態と全く異なるのは当然である。研究上のデータ交換というより、むしろ教育・研究機関の組織を維持してゆく為の事務的書類や連絡事項等の情報交換となっている。勿論、このようなものは、電子メールというシステムをLANにより実現すれば、非常に便利になる。

現在の本学に於ける通信設備を見ると、電話網のみである。これは、学内のネットワークとしても働くが、公衆網(NTT)との結合により外の世界ともつながりを持っている。電話は、人間の肉声をもって直接互いに情報交換ができるから、基本的で且つ強力なものである。だからこそ、電話は手軽なものとして普及し、学内の何処からでも利用出来るまで設備投資がなされたと言ってよいだろう。学内の隅々まで張りめぐらされた電話網である為、現在はこの回線の一部転用し、手軽に大型計算機センターや図書館システムと端末間のデータ通信回線に利用する事が増加し、今や学内の電話回線はパンク一歩手前の状態である。

図書館システムの利用者グループは、それなりの仕事のlocalityを持っており、また大型センター利用者も又同様である。これら二つのlocalityの為の、研究グループ為の、そして学内電子メールの為等のLANを集合したシステムが、今計画されており、既に概算要求として提出されている。これにより、電話網にとって代わる新しい時代に向けての学内ネットワークの為の基盤整備がなされることだろう。学内LANの整備により、大学図書館の情報の共有資源としての役割は、益々重要なものになるだろうし、又そういう方向で新しい図書館の在り方と設備投資の在り方を考えてゆくべき時である。

必要な情報を求め、キーワード等による検索にディスプレイに向かう事が各自の卓上で出来るようになる日も、そう遠くはないと思われるが、LANの目的は人々をディスプレイにクギづけにするためでは決してない。電子的ネットワークを通して、本来の人と人とのネットワークが拡がり、情報を求める事による新たな人々との出会いを期待したいものである。

Library

Library

海外研究機関での図書館を利用して

触媒研究所助手 国 松 敬 二

私の所属する触媒研究所は教官数 25 名程の小部局で、図書室の規模も当然小さい。しかし、私達が研究活動を進めるのには必要にして十分な機能を備えているので、私はたまたま稀に理学部等の図書室に行って雑誌のバックナンバー等を探しに行くことを除けば、研究所以外の図書室の利用経験、知識はほぼ無いに等しかった。しかし、1976年に英国へ British Council の給費生として留学する機会に恵まれ計 4 年半の在英中に Bristol 及び Southampton 両大学の図書館を長期にわたって利用することになった。また 1983 年から 1984 年にかけて 1 年間米国 IBM 社の San Jose 研究所に客員研究員として滞在し、そこで一企業の研究所における図書を利用する機会にも恵まれた。

このような経験を通じて、一利用者目の目に海外における大学、研究機関の図書館がどんな風に映ったかを思い出しながら以下につづって見た。

最初の Bristol 大学化学科には 1 年 3 カ月程滞在し、そこで利用したのは化学科の図書である。化学科とは言ってもこの大学では School of Chemistry という特殊な制度になっていて、一つの学部のような規模と機能を有していた。したがって図書室も大きかった。図書の利用は利用者として登録することから始まったが、これは図書の借り出しと、図書室内にあるコピー機利用のためと 2 つの目的をもっていた。北大における私共の研究所あるいは理学部の図書と比較して根本的に異なっているのは、図書室が本、雑誌等を借り出すのみどころではなく、そこで読み、考え、仕事をする場所である、ということであろう。それを保障するため、広いスペースに、各自のプライバシーが守られるよう配慮された机、いす等が数多く配置されていた。机に本を山と積んで勉強している学生、研究者の姿が良く見られた。一方、以上のような充実した面に反して貧弱だったと私に思われたのはコピーの設備だった。コピー機は図書室の奥の小さい部屋にすえられ、常時カギがかかっていた。コピーをする場合には入口の受付の女性の職員に申し出ると、登録者であることを確認してからカギを借してくれた。コピー室に当時あった機械は驚いたことに日本の Mitsubishi 製のもので、これがまたコピー速度がおそく、しかも湿式方式のため、コピーを一枚取るたびにいやな臭いがせまいコピー室に満ちて、私はコピーを取る毎に、これは多分健康に良くないという思いを常に禁じ得なかった。私は別に自分の責任でもないのに、日本製のコピー機だということに内心恐縮した。同時に、イギリス人はなぜこんな機械をがまんして使っているのだろうと不思議だった。

Southampton 大学の化学科には、主として勉強するだけの小さな図書室があり、学科の学位論文が全部そろっていて Ph. D 論文を書く大学院生の便に供されていた。私達は専ら大学の中央図書館を利用したわけである。今から約 9 年前であったが、利用者として登録するとコンピュータ化されたカードをくれた。本には利用カードがついていたがこれもコンピュータカード方式になっていて、借り出す時には自分の利用者カードと共に提出すると手続きがすぐ

できた。図書館の出入りには専門の職員が一人一人のカバンの中をチェックするのに閉口したが、図書館で落ち着いて仕事をすることに慣れて来ていた私は良く利用した。実験室ではどうしても落ち着いて考えることができなかったので図書館は非常に良い書斎の役目を果たした。ここでのコピーは Bristol に比べ問題にならない位充実していた。これは学内の中央図書館ということによるものと思われるが、ゼロックスが4~5台いろいろなサイズのものがそろっていた。専門の職員が4~5人いてコピーは原則として彼等にやらせてもらう建前であった。しかし、空いている機械があり、顔馴みになると自分でやらせてもらうこともできた。しかし、コピーする雑誌の名、巻号、ページ数、自分の所属等をいちいち記入して提出しなければならずやっかいではあった。一方、用事がある時等はコピーを頼んで置いてくれば職員がやってくれるので便利でもあった。コピー室は5時で終りで、それ以降は図書館内のコイン方式の機械を利用しなければならず、当然学生が使用しているためいつも行列しなければならなかった。一枚が当時で約25円位に相当していた。

米国 IBM 社の図書室はそこで読み、仕事をするような設備は全くなく、新聞、雑誌等を読むための簡単なソファが2~3個置いてあるだけであった。面白いのは、図書室以外の他の部分にはコンピュータ化が進み、1人1台位の割合でコンピュータの端末が各自の部屋で使用でき、計算、論文作成等が非常に効率よく常時できたのに比べ、図書の貸し出しは私共の研究所と同様に、本の内側についているカードに名前を書き込み受付に提出する、という方式を依然として採用していたことである。しかし、専任の職員が4人位いて各自が独立した部屋に机をおき、私達の本についての相談には実に良くのってくれた。特に論文検索にはキーワードを紙切れに書いて依頼するだけで簡単にやらせてもらうことができたのは便利であった。コピーの便について言えば、IBMはコンピュータだけでなくいろいろな機械を製作して販売しているがコピー機もその一つである。というわけで当然自社製品の愛用という方針からIBM製のコピー機が図書室に1台、また研究所のあちこちにも何台かあったが、これがまた良く故障し、「out of order」というはり紙をしょっちゅう目にした。しかし、IBM研究所でのコピーで特筆すべきは、大量のコピーを必要とする時にはコピー専門の部門があって、そこへ原本を持って行きページ数及び部数を用紙に記入すると1~2日でやってくれた。研究所では私達のような外国人のために専属のプロの英語の先生をやとって1週間に一度の割合でレッスンがあった。この方は非常に日本びいきの方で、私達日本人に extra な個人レッスンをしてくれたが、そんな関係で通常のレッスンのテキストのコピーを良く頼まれた。もちろん上述のコピー部門に行ってやらせてもらうのであるが、非常に熱心な先生で1回のレッスンに20~30ページのコピーが配布された。

以上のように、結局海外での大学、研究機関におけるコピー事情のような内容になってしまったことにうしろめたさを感じつつ終ることにする。

「北海道大学図書館オンラインシステム」の愛称募集

システムは、皆様方のご協力により順調に稼働しております。他大学では、自館システムに愛称をつけて呼んでいますが、本学のシステムにはまだ愛称がありません。例えば HOTNET (北大図書館ネットワークの略) とか、HOKUTO: 北斗 (北大図書館の略) とか、親しまれる愛称を募集しますので奮って応募してください。

送り先は、学術情報課、締め切りは12月6日までです。

—1987年IFLA大会はブライトンです—

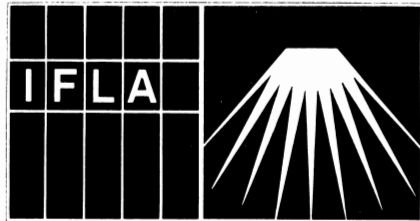
午 来 信 子

IFLA 東京大会は8月24日～29日まで開催され成功裡に終わりました。来年はブライトン(英国)で開かれます。テーマは「変わりゆく世界の中の図書館情報サービス」です。この拙文は東京大会の印象記です。この印象記をもって次回のブライトンへ、そして1988年シドニーへ、1989年パリへ、1990年ストックホルムへ、1991年モスクワへの関心が高まりますことを期待して書きました。

10年程前に国際会議のお手伝いをしたことがありました。今回東京大会という国際会議に出席しました。青山学院大学を主会場に国立劇場での開会式、全体会議、ホテルニューオータニでの展示会、展示レセプション、歓迎レセプション、日本青年館での日本の夕べ(芸能鑑賞)、閉会式、その他様々な催物があり、大会関係者の周到的準備に感謝すると共に日本の図書館界の力を知る思いでした。9時から部会が開かれ同時通訳の入る部会と入らない部会があり、後者の場合は座長のスピーチと質問、その答えに対する通訳がなされました。開会と同時にペーパーの配布が行われ、希望の言語に挙手することにより手元に配られました。発表は英語で行われ、質問者は質問を行う言語と自分の名前を言って質問本論に入りました。毎日IFLA expressが出され現在の大会の状況がすべてつかめるように配慮されておりました。

さて登録を済ませた私は約300人が参加しましたオリエンテーションに、大きな階段教室の前方に大会関係者、後方に同時通訳のためのブースが並んでおり、私はイヤペットを耳にチャンネルを日本語に合えました。IFLA会長のH. P. ゲー氏より国際的な図書館協力についてのお話が始まり片方の耳からは英語(後に仏語、独語も)が、イヤペットからは日本語が聞えてきました。このような状態が5日間も続くことに対する緊張感が拡がりました。実際私のような不馴れな者にとっては意識を集中させていないと同時通訳の意味は不鮮明になりがちでした。心細さと共にシン・ドイ所に来てしまったという思いがしました。しかし幾人もの友人ができました、それに同業者がこんなにも沢山いること、そして様々な問題をかかえながら世界中の国々にいる、という思いを強くしました。開会式のあった夜は東京都知事主催歓迎レセプションが開かれ、皇太子殿下、美智子妃殿下が行啓され、各国駐日大使、国会議員の参加があり2,000人を越える盛大なパーティーでした。参会者にお声をかけられた美智子妃殿下はシックな装いにカクテルを手にとられ、笑顔がたえませんでした。

この大会で私は24の部会に出席することができました。その1つに書誌調整部会の分類・索引分科会「日本における分類法の特徴」(石山洋)がありました。この部会で感激したことが2つありました。①大学図書館の75%が日本十進分類法(NDC)を使用しているにもかかわらず北大はなぜデュイ十進分類法(DC)を使用してきたのか、という疑問に対する歴史的経過



The 52nd General Conference of International Federation of Library Associations and Institutions-Tokyo

がはっきりしたことでした。それは同論文によりますと DC が日本で最初に使用されたのは札幌農学校（現北大）図書館で Dewey の卒業した Amharst College 出身の W. S. Clark が初代の教頭を務めた大学である、という説明に接したのです、農学校以来の伝統であるとも聞き、たぶんそうなのでしょうと思っていたことがはっきりしたのでした。同論文より日本における分類法の普及率を拾い出してみます。NDC は公共図書館、高専図書館の 99%、学校図書館の 98%、大学図書館の 75%、DC は大学図書館で洋書に限って使用している図書館が 55 館（7%）、専門図書館で和書、洋書共通に使用している図書館が 20 館、洋書に限って使用している図書館が 40 館（1~3%）、国際十進分類法（UDC）は専門図書館で 264 館（14%）です。周知のように北大は水産学部を除いて和書、洋書共通に DC を使用しています。このような例は大学図書館では数字に表われず、専門図書館で 20 館を数えるのみです。DC の本体、その手引書類の訳本を目にすることがなかったのは以上の数字が物語るのでしょう。しかし学術情報システムのデータ形成において各国の MARK を参照、利用できるという状況においては、洋書における DC の使用は大きな強みです。この農学校以来の伝統を守ってゆくためには DC の理解をより明確なものにする必要があります。（②にも関連しますが、和書における DC の使用に、私は疑問を持っております）、② 中国の方からの質問に「あらゆる資料に一つの分類表を用い得ると思いませんか」というのがありました。同感でした。国立国会図書館の分類表使用の経緯をみることによって一面を知ることができます。同図書館は戦後、米国図書館使節の勧告を受け入れ、洋書について DC を採用し、その後 1963 年から法律関係洋書の分類に DC（14 版）が英米法中心で適正な分類を行なえないため独自の分類表を作表しました。この意味は一著作物が背景にもつ思想、文化を十分表現した分類表によるのが書誌分類における本質といえるのではないのでしょうか、詳述はさけますが和書における DC の使用はこの本質にふれるものと思わざるをえないのです。

プロフェッショナル・ツアーという図書館見学が 1 日ありました。最高裁判所図書館、東洋文庫、経団連図書館の専門図書館コースを選びました。国立劇場の隣にあって開会式の日に驚嘆してながめた、何とも形容しがたい石造りの建物が最高裁判所でした。内装、外装に茨城県の花崗岩が用いられ、自然光を採り入れているのが特徴で、法廷は大法廷 1 室、小法廷 3 室あり、第一小法廷と大法廷に入室が許されました。内部は大理石で造られており、裁判官席と裁判関係者席が向い合うようになっており、法律審を扱う最高裁判所の特色で、現建物になってからとり入れられたようです。大法廷の前方に二枚の壁掛によって太陽が表わされ、後方にこれも二枚の壁掛によって月を表現した抽象画があり、静謐が感じられるようでした。次に図書館へ、エレベータを降り中央ホールに入るとポアソナードの胸像があり、壁には聖徳太子の明るい色彩の具象画が三枚ありました。蔵書は 20 万冊（和 12 万、洋 8 万）、和書は NDC（6 版）を用い、洋書は国別で区分し内容で細区分しておりました。閲覧室の机、椅子の荘重なこと、休憩席にふさわしい空間とソファ、書架の間隔の広いこと、図書職員 25 名でサービス対象者は 1,200 名、間接には下級裁判所関係者 2 万人という専門図書館でした。

IFLA のコア・プログラムについての雑感で終りたいと思います。6 つある中で UBC (Universal Bibliographic Control= 世界的書誌調整)、UAP (Universal Availability of Publications= 世界的文献利用) そして UBC の中に各国のマークを共通のフォーマットに相互乗り入れできるようにしようとする IMP (国際マーク・プロジェクト) が発足しています。この UBC と UAP の国内の試みの一つが文部省の学術情報センター事業と考えることが実感できました。私達が今直面している仕事が 10 年程前の IFLA のプログラムにさかのぼることができる

のです。我々の仕事は社会的要請の中に確実に位置を占めているようです。他に新しく PAC (図書の保存と保護) があります。これは過去の知的、文化的遺産を保持しようとするもので、特に 19 世紀初頭から利用され始めた酸性紙に印刷された図書の劣化が著しく進んでいます。

「図書」はかつて「印刷された人類」と言われてきました。この図書がこのままでゆくと「崩れる」状態にあり、そのための対策が急務であり、米国、カナダでは脱酸処理の開発が進められています。非常に困難な状態にあるようです。

大会全体を通じ議長(座長)の博識、明晰に加えてユーモアをまじえての対応が印象深く、良い異文化にふれることができましたこと、幸いでした。
(教育学部図書室)

◆ 会 議

第 128 回 図 書 館 委 員 会

<と き 昭和 61 年 6 月 16 日 (月)>

<と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

議 題

1. 昭和 60 年度図書及び新聞雑誌購入費決算について
2. 昭和 61 年度運営費予算配当書について
3. 昭和 61 年度図書及び新聞雑誌購入費予算配当書(案)について
4. そ の 他

第 129 回 図 書 館 委 員 会

<と き 昭和 61 年 9 月 24 日 (水)>

<と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

議 題

1. 逐次刊行物等検討小委員会報告について
2. そ の 他

第 88 回 教 養 分 館 委 員 会

<と き 昭和 61 年 7 月 2 日 (水)>

<と ころ 教 養 分 館 会 議 室>

議 題

1. 昭和 61 年度図書予算(案)について
2. 報告事項その他

第 89 回 教 養 分 館 委 員 会

<と き 昭和 61 年 8 月 6 日 (水)>

<と ころ 教 養 分 館 会 議 室>

議 題

1. 参考図書の選定について
2. 視聴覚資料の選定について
3. そ の 他

図書担当掛長会議

<とき 昭和61年9月19日(金)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 大学図書館の公開について
2. 書誌情報品質管理作業班について
3. 図書書誌データプルーリストのチェック作業について
4. その他

第33回 国立大学図書館協議会総会

本年度の国立大学図書館協議会総会は、東京地区の担当で、お茶の水女子大学を当番館として、東京医科歯科大学を会場に、6月11、12の両日にわたって開催された。参加者等は、95大学、238名で、文部省からは、西尾学術情報課長、鈴木企画官、安永学術調査官、原大学図書館係長が列席した。なお、議事等は、次のとおりである。

○ 協 議 事 項

- ①理事選出 ②監事選出 ③昭和60年度決算 ④昭和60年度岸本博士記念基金収支決算報告
⑤昭和61年度予算(案) ⑥国公立大学図書館協力委員選出 ⑦IFLA 東京大会の協力体制 ⑧調査研究班 その他

○ 研 究 集 会

テーマ 情報化社会における大学図書館の役割

- ① 東北大、東京学芸大
② 山口大、筑波大
③ 東工大、京大 からそれぞれ発表

○ 分 科 会

第1分科会(運営・サービス)

1. 学術情報ネットワーク充実・利用上の諸問題
2. 学術情報システムの機能拡充
3. 文献複写の料金問題
4. 大学図書館の電算化に係わる問題点
5. 大学教育の開放(国際化を含む)と大学図書館の役割
6. 相互貸借の推進方策

第2分科会(予算・人事)

1. 学術情報システムに対応する大学図書館職員の研修
2. 学術情報資源の収集・整備のための予算措置
3. 電算化要員の人材確保と研修
4. 外国雑誌購入費の削減回復
5. 高額二次資料購入費の増額
6. 大学図書館の電算化に係わる経費の確保

○ 全体会議

各分科会のとりまとめ

第 36 回 北海道地区大学図書館協議会総会

本年度の地区大学図書館協議会総会は、帯広畜産大学の当番により、9月5日(金)同大学を会場に開催された。19大学36名が出席し、慣例により当番館の帯広畜産大学小野館長を議長に選出し議事が行われた。

協議事項は、次のとおりである。

報告事項

1. 幹事館会議
2. 第29回北海道地区大学図書館職員研究集会及び講演会
3. 各館界の動向
4. 昭和60年度協議会決算・同監査

協議事項

1. 協議会の事業計画について
2. 昭和61年度協議会予算(案)について
3. 第37回北海道地区大学図書館協議会総会の当番館について
4. 第30回北海道地区大学図書館職員研究集会の当番館について
5. その他

なお、第38回総会当番館は、北海道東海大学、第30回研究集会当番館は、札幌学院大学に決定した。

◆ 研 修

第 29 回北海道地区大学図書館職員研究集会及び講演会

本年度の研究集会は、当地区20大学等130名が参加して次のように行われた。なお、今回は地区協議会事業の一環として、新たに講演会が開催され、ともに、有意義かつ盛会裡に終了した。

○ 研究集会

<とき 昭和61年8月29日(金)>

<ところ 札幌大学2号館>

司会 北星学園大学 武本昇三

北海道薬科大学 竹永由美子

「記念講演」

図書館風土考

札幌大学 梅原達治

「報告」

IFLA東京大会に参加して

北海道大学 酒井豊

「研究発表」

札幌医科大学附属図書館における相互貸借

—現状と今後の方向—

札幌医科大学 永岡茂

北海道大学図書館オンラインシステムの開発経緯と現状

北海道大学 逄昭二

○ 講演会

<とき 昭和61年8月30日(土)>

<ところ 札幌大学2号館>

“大学図書館の相互協力ネットワークについて”

講師 鶴見大学教授 田辺広

「昭和 61 年度大学図書館職員長期研修」に参加して

佐 藤 清 一

昭和 61 年度は、第 18 回目の研修として、筑波学園都市の図書館情報大学を主会場に、筑波大学図書館、同大学学術情報処理センター、東京大学大型計算機センター、学術情報センター等 13 会場で、7 月 28 日から 8 月 16 日までの 3 週間にわたり開催された。1 週目と 3 週目は筑波地区、2 週目は東京地区で、講義、演習、見学、共同研究討議等、多彩なプログラムで実施された。

この研修の目的は、「大学における教育、研究活動の急速な進展に伴い、大学図書館が利用者に対して、学術情報を迅速かつ的確に供給すること」および「大学図書館の情報提供体制を整備するとともに、図書館職員に対し学術情報についての最新の知識を教授し、資質の向上を図る」ことにあり、具体的には、学術情報システムの形成および学術情報オンラインネットワークの形成についての認識を高めることにあった。

研修生は、国立 33 名、公立 1 名、私立 3 名の計 37 名（男性 25 名、女性 12 名）で、すでに電算機が導入稼動している大学、および電算機の導入を計画中の大学であり、何らかの形で電算化に関係がある現場の中堅職員が中心であった。

講義内容は、1) 総論、2) 一次資料の整備と相互協力、3) 目録、所在情報の形成と大学図書館の電算化、4) 二次資料データベース形成とネットワーク、5) 情報検索サービス、その他関連事項についてであり、猛暑の中熱心に受講した。

研修第 1 日目は、受付、オリエンテーションに続き、図書館情報大学藤川図書館長の「大学図書館の在り方」の講義に始まった。本研修のほとんどの講義は図書館電算化を背景にした電算化中心の講義内容であった。

大学図書館の電算化は、本年 4 月、文献情報センターが発展的に改組、学術情報システムの中核としての学術情報センターが設置され、我国のナショナルセンターとしての活動が開始され、各国 MARC による書誌、所在情報の提供サービスが開始された。学術情報システムの実現は、実験段階から実用段階に入り、本学附属図書館も、本年 4 月から電算化を実施し、各部局で 100 台の端末機が稼動した。北海道大学オンラインシステムの基礎としてのデータベースの構築も着々進み、全国的学術情報ネットワークへの参加も進められ、実用に一步踏出した。

情報検索については、マニュアル検索、機械検索両面にわたり、筑波大学、同大学学術情報処理センター、学術情報センター、東大大型計算機センターで実習が行なわれた。マニュアル検索では、二次資料の内容構成等の説明があり、グループに分れ、指定された二次資料を使い、演習問題についての検索実習が行なわれた。つづいての機械検索では、筑波大学学術情報処理センターが構築しているオンライン検索システム「UTOPIA」へ接続、機械検索の実習が行われたが、勉強不足のため「WELCOMEUTOPIA」から一步も進むことができなかった。学術情報センターでは、各国 MARC による目録・所在情報、学総目データベースへ接続しての実習を行なった。東大大型計算機センターでは、大型計算機センターにおける情報検索の実際として、データベース TOOL-IR/ORION、TOOL-ULP 等へのアクセスを行い、データベース検索の実習が行なわれた。

情報検索サービスの最終目的は、利用者が必要としている資料を迅速に入手できること

で、図書館はこれをサポートするために書誌・書在情報の整備はもちろん、分担収集を含めた国内資料の充実が必要であり、資料の効率的運用を計るための図書館間相互協力ネットワークの必要性を強く感じた。

施設の見学は、上記以外の会場として、上智大学図書館、東京工業大学図書館、日本出版販売(株)、NTT霞か関コミュニティーセンター、日本経済新聞社、国文学研究資料館、高エネルギー物理学研究所の各施設で研修と各システムの見学を行った。特に日版王子流通センターでは、出版物の流通過程をつぶさに見学する機会があり、同センターの流通量が1日に20万冊を超えているのには大変驚いた。また、各施設のデータ通信網、データベース(日経 NEEDS、国文学データベース)等の新しいシステムに接する機会があり大きな収穫であった。

また、この研修で全国各地から参加された研修生と相互の親睦を深め、多くの友を得ることが出来、人的ネットワークを構築できたことは大きな収穫であり喜びでもあった。

終りになりましたが、文部省、図書館情報課、大学ならびに各講師の皆様方には大変お世話になりました。この紙上をおかりしてお礼申し上げます。(水産学部図書掛長)

昭和 61 年度北海道地区図書館電算化実地研修を終えて

佐 藤 貞 司

コンピューター・ルームの朝の目覚めは早い。6時には自動運転プログラムが機能して空調装置がうなりをあげはじめ、前日に全学のワークステーションから入力されていた書誌データが前々日までの累積分につけ加えられてゆく。これがデータ・ベース更新作業で、コントロールデスクの画面とこれに連動するプリンターには作業の進行状況が刻々と表示されてゆく。この作業が終わるとラインプリンターはこの前日のデータを目録ブルーリストとして打ち出しはじめ、終了するのがちょうど職員の登館時刻ごろ。つぎに、万が一の事故に備えて、この更新されたデータをファイルごとにそっくり磁気テープにコピーしておく作業がマニュアルでなされる。そして、あわただしく学内オンライン用プログラム VIS と学術情報センターとの接続プログラム UIP をたちあげてシステムの稼働開始の午前9時をむかえる。

これが、昭和61年度北海道地区図書館電算化実地研修計画のもとで、6月1日から8月31日までの3カ月間、13週間にわたって併任研修員として受入れていただいた図書館学術情報課で毎朝くりひろげられる光景です。

この研修計画は、学術情報センター構想における本道の地域センター館としての北大図書館が、道内各国立大学図書館の業務電算化基幹要員の養成を援助することを目的として実施して下さったもので、その内容は次の4項にとりまとめることができます。

- 1) 研修員所属大学の雑誌システムの基本データとなる学情センター「学総目」磁気テープの解析と大学別雑誌目録の作成をとおしてのプログラム技法の習得。
- 2) 研修員所属大学の目録システムの中核となる学情センター「目録システム」の操作および内容解析とファイルへの取込み実習をとおしてのシステム設計技法の習得。
- 3) 稼働中の NEC ACOS システムの中央処理装置の管理実習をとおしてシステム運用の実務を体験する。
- 4) 電算化された業務の館内各掛での実習。

実は、この4項は研修員募集要項の記述をほぼ転記したのですが、いま研修をおえて手

元にのこされた3枚の月間予定表と、3名の研修員がワークステーションをワープロにかえ交替でつけた「日誌」の日々のメモを繰ってみますと、ほぼ当初予定されたとおりの研修をさせていただきます。いま、地域センター館としての北大図書館としました。北大図書館にはこのような研修計画を実施しなければならない「義理」はどこにもないにもかかわらず、このような機会を与えていただいたことを心から感謝したいと思います。こうした実地研修制度の他地区では例がないなかでの北大図書館当局の英断を特筆させていただきたいと思ひます。ありがとうございました。

学情課での3カ月、北大図書館オンラインシステムの舞台裏をつぶさに体験させていただきました。昨年8月末に「概要」を聞かせていただいた時点でその構想に魅せられ、はやばやと電算化を独自のシステム開発からこれへの参入へと自館の指針をオリエンテイトさせたものひとりとして、その選択は誤っていなかったと実感できる毎日はおおいに意義がありました。

業務の電算化—雑誌管理や閲覧管理など個別的な事例はわが国でもすくなくありませんが、学術情報センター構想に対応して目録(検索)管理を中核にすえ、しかもトータルシステムとして構築されたこのシステムの先進性・有効性は、こえだかに評価されてしかるべきものではないでしょうか。

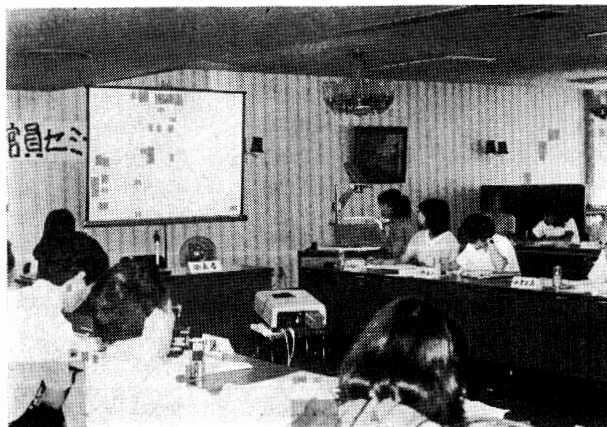
なお、個別個人的な研修効果となると疑問なしとしません。なぜならプログラム技法の習得とかシステム設計技法の習得など、この研修計画の眼目となっていた事項についてはどう考えても‘guest’として終始してしまい、研修を終了したのだから北教大の電算化基幹要員なのだとの自信・自負はもてそうにないからです。無事修了式を迎えられたことについては、同期の2人の研修員—室蘭工大図書館の藤田 隆氏と北見工大図書館の久田 貢氏の友情と協力に感謝するばかりだからです。この紙面を借りお二人にあらためて謝意を表します。ありがとうございました。

(北海道教育大学附属図書館)

第13回医学図書館員セミナー

例年にない冷夏といわれていた北の街にもやっと夏の気配がおとずれた7月31日・8月1日の2日間にわたって、医学部図書館を会場に日本医学図書館協会主催の標記セミナーが開催されました。これは昨年の秋のうちから、札医大、旭川医大それに本学医学部図書館の3館によって実行委員会が組織され、準備がすすめられてきたものです。

「情報化社会における医学図書館—その現状と課題を明らかにする—」というテーマのもと、全国各地から21名の医学・歯学図書館員が参加し、1名の発表時間20分、質疑応答時間10分というスケジュールで、連日の暑さをも吹きとばすように活発な発表と討論が行われました。また、午後の休憩時間を利用して、館内見学と北海道大学附属図書館オンラインシステムのデモンスト



レーションも行われた。

このセミナーは医学図書館員としての経験年数が3年以上の館員を対象としているため、集った人々はいずれも各館で中堅的役割を果たしている人達ばかりであった。そんなこともあってか、一つ一つの発表はそれぞれ日常業務の中から派生した現実の問題を踏まえたものばかりであり、今後医学図書館が直面することになる重要な事柄が数多く含まれていると思われる。例えば医学図書館における雑誌をめぐる問題や、営利企業に対する相互協力について、また病院図書室とどのように協力・調和を保っていくことができるのかといったことなどである。

ともすれば日常の仕事に追われ、医学図書館が現在かかえている問題は何なのか、と問うことを怠りがちであった私達にとって、このセミナーを北海道で実施することができたということは、医学図書館員の意見を直かに聞くことができたということだけでも、たいへんな収穫であったといえることができるであろう。

◆ 統 計

部 局 別 蔵 書 冊 数

(昭和61年3月31日現在)

部 局	和 書	洋 書	合 計	備 考
附 属 図 書 館	427,544	302,862	730,406	法学部含む
教 養 分 館	100,418	52,312	152,730	言語文化部含む
文 学 部	78,745	91,530	170,275	
教 育 学 部	59,091	23,975	83,066	
法 学 部	(57,242)	(101,757)	(158,999)	附属図書館所蔵
経 済 学 部	49,978	39,401	89,379	
理 学 部	46,265	132,138	178,403	情報処理教育センター、実験生物センター含む
医 学 部	79,271	96,844	176,115	附属病院、アイソトープ総合センター含む
歯 学 部	12,472	11,686	24,158	附属病院含む
薬 学 部	4,493	12,713	17,206	機器分析センター含む
工 学 部	164,800	132,777	297,577	
農 学 部	182,850	101,658	284,508	附属農場、演習林含む
獣 医 学 部	9,628	18,787	28,415	
水 産 学 部	68,112	41,286	109,398	
教 養 部	(11,924)	(5,217)	(17,141)	()は教養分館へ管理換
言 語 文 化 部	15,855	8,140	23,995	
環 境 科 学 研 究 科	(14,213)	(41,016)	(55,229)	教養分館所蔵
低 温 研 究	7,852	3,595	11,447	
応 電 研 究	6,327	13,943	20,270	
触 媒 研 究	5,008	14,189	19,197	
免 疫 研 究	2,949	9,686	12,635	
スラブ研センター	1,390	6,591	7,981	
大型計算機センター	(2,050)	(30,646)	(32,696)	()は附属図書館へ管理換
事務局	1,080	8,865	9,945	
厚 生 部	854	1,109	1,963	
医療技術短期大学部	1,824	156	1,980	保険管理センター含む
	621	97	718	体育指導センター含む
計	13,689	2,098	15,787	
計	1,341,116	1,126,438	2,467,554	

昭和60年度 部局別図書・雑誌受入冊(種類)数

区 部 分 局	図 書							雑 誌						
	和 書			洋 書			計	和 書			洋 書			計
	購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他		購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他	
附属図書館	3,689	2,480	[210] 2,069	4,271	823	[2,774] 3,869	[2,984] 17,201	223	2,194	—	452	522	—	3,391
教養分館	3,297	10	[111] 277	3,351	1	[343] 448	[454] 7,384	265	25	—	203	—	—	493
文学部	3,537	213	151	4,958	191	958	10,008	247	913	3	456	3	—	1,622
教育学部	2,384	37	607	547	5	210	3,790	242	498	7	191	—	1	939
法学部	(1,236)	(987)	(632)	(2,682)	(406)	(846)	(6,789)	(123)	(372)	—	(324)	(33)	—	(852)
経済学部	2,039	524	1,124	1,591	47	547	5,872	157	686	1	239	54	1	1,138
理学部	464	23	163	1,122	224	1,794 [53]	3,790 [53]	130	341	1	681	333	4	1,490
医学部	566	46	1,375	667	34	1,559	4,247	320	449	—	788	64	1	1,622
歯学部	377	—	149	154	—	320	1,000	126	124	—	210	30	—	490
薬学部	118	17	34	44	—	524	737	32	51	—	107	4	—	194
工学部	1,891	38	900	1,194	47	1,872	5,942	354	920	1	768	39	1	2,083
農学部	2,547	65	353	597	5	706	4,273	618	1,194	6	605	154	—	2,577
獣医学部	107	10	43	139	5	383	687	33	180	—	143	144	1	501
水産学部	858	37	522	143	42	906	2,508	304	651	2	265	323	5	1,550
教養部	(247)	—	(7)	(312)	—	(2)	(568)	(40)	—	—	(102)	—	—	(142)
言語文化部	(993)	—	(111)	(2,966)	—	(343)	(4,413)	(48)	—	—	(91)	—	—	(139)
環境科学研究科	674	10	132	224	—	322	1,362	38	81	1	116	35	1	272
低温科学研究所	91	7	89	80	14	411	692	29	287	2	85	184	1	588
応用電気研究所	119	—	25	141	—	550	835	30	120	1	131	10	—	292
触媒研究所	27	—	8	111	—	158	304	14	7	—	42	23	1	87
免疫科学研究所	23	—	—	48	—	221	292	12	102	1	47	—	—	162
スラブ研究センター	106	—	19	1,909	40	200	2,274	4	142	1	127	56	1	331
大型計算機センター	7	—	—	62	—	174	243	33	33	2	55	—	—	123
事務局	1	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
学生部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
医療技術短期大学部	1,012	21	[2,034] 2,198	130	—	[50] 325	[2,084] 3,686	121	104	—	41	—	—	226
合 計	23,934	3,538	10,238	21,486	1,478	16,457	77,131	3,332	9,102	29	5,752	1,978	18	20,211

図書のうち、附属図書館、教養分館、文学部、医学部、医療技術短期大学部の上段〔 〕書は学内管理換により増となった分で内数である。従って全学の受入冊数の合計数は学内管理換分を除いたものである。

昭和 60 年度 附属図書館利用統計

閲覧室名 開館日数	書庫出納カウンター		開架図書室 館外貸出	語 学 演 習 室	参 考 室 図 書 室	北 方 室 資 料 室	合 計
	館内閲覧	館外貸出					
利用部局等	290日	290日	273日	290日	290日	290日	
文 学 部	266人	912人	2,825人	41人	1,601人	399人	
教 育 学 部	36	143	415	—	134	99	
法 学 部	535	1,367	3,665	78	714	30	
経 済 学 部	31	57	1,098	49	437	22	
理 学 部	40	46	2,751	34	254	17	
医 学 部	5	16	461	17	52	20	
歯 学 部	6	9	371	2	43	5	
薬 学 部	1	1	540	—	23	1	
工 学 部	13	31	1,379	20	185	109	
農 学 部	14	19	1,220	77	140	105	
獣 医 学 部	—	—	75	—	60	7	
水 産 学 部	—	—	5	—	10	2	
教 養 部	162	178	4,805	131	458	207	
各 研 究 所	—	—	—	—	220	16	
医 療 技 術 短 期 大 学 部	5	17	625	8	48	—	
教 官	125	2,269	475	87			
院 生	107	2,426	1,135	88			
職 員	70	203	670	4			
学 外 者	413	296	49	—	472	1,031	
利 用 者 合 計	1,829	7,990	22,564	636	4,851	2,070	39,940 人
利 用 冊 数	4,771	21,188	31,319	658巻	289 ¹⁾	1,315 ²⁾	58,882 冊 658 巻

注 1) 国連資料, OECD資料, EC資料, 図書館学資料のみ (参考図書は貸出ししない)

2) 館外貸出冊数 (室内利用は含まず)

3) 参考図書室については, 教官・職生・学生こみの人数

4) 北方資料室については, 教官・職員・学生こみの人数

昭和 60 年度 文献複写・相互利用統計

I. 国内: 附属図書館相互利用掛を經由して学外へ依頼した件数 (国立・私立とも)

申込部局	附 属 図 書 館	文学部	法学部	経 済 部 学 部	理学部	歯学部	薬学部	農学部	獣 医 部 学 部	教養部
件 数	98	443	354	3	16	2	8	22	5	3
申込部局	言 語 文 化 部	環境研	低温研	応電研	触媒研	免疫研	スラブ	大型セ	医 技 大 短 大	合 計
件 数	30	97	3	51	29	17	45	1	15	1,242

II. 国内：新方式（国立大学等図書館相互における文献複写）で各部局図書館が受付・依頼を行った件数

部局	附属図書館	文	教	経	理	医	歯	薬	工	農	獣医	水産	低温	合計
受付	1,702	144	109	86	—	1,723	—	156	1,064	1,203	485	370	162	7,204
依頼	421	318	81	150	570	912	75	124	440	242	204	254	29	3,820

III. 国外への依頼件数（参考調査掛）

英	米	西独	ソ連	オランダ	韓国	仏	その他	合計
265	172	66	14	13	12	10	18	570

IV. 図書館間相互貸借（相互利用掛） ○他館への貸出 328冊 ○他館からの借用 178冊

V. 附属図書館マイクロ電子・複写業務実績（館内分を除く）（相互利用掛）

申込者	件数 ^注 (件)	複写論文 点数 (点)	処理枚数・コマ数					
			総数	内訳				
				電子複写 (枚)	マイクロ フィルム (コマ)	マイクロ フィッシュ (枚)	引伸焼付 (枚)	リーダー プリンター (枚)
学内者	445	995	18,893	3,418	920	—	246	14,309
学外者	3,070	4,742	63,497	57,575	2,125	—	—	3,797
合計	3,515	5,737	82,390	60,993	3,045	—	246	18,106

注) 件数は申込延人数と同じ。(複写不能分を含まず)

VI. 参考質問（参考調査掛）

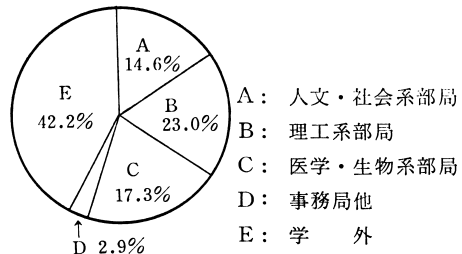
1. 部局別質問件数

文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	獣医	水産
265	50	126	83	446	242	67	106	385	237	83	36
教養	言語	環境	低温	応電	触媒	免研	スラブ	医短	事・他	学外	合計
92	36	64	67	103	47	22	55	41	139	2,039	4,831

2. 質問内容別件数

文献所在調査	2,974
書誌調査	521
事項調査	336
利用指導	1,000
合計	4,831

3. 質問分野別比率



昭和 60 年度 教養分館利用統計

(開館日数 290 日)

利用部局等	開架図書室		語学演習室		ビデオ視聴室	
	館外貸出					
文学部	1,511冊	886人	6巻	6人	71巻	63人
教育学部	148	87	0	0	1	1
法学部	716	411	58	46	13	12
経済学部	309	182	52	50	32	28
理学部	2,763	1,649	3	2	52	39
医学部	478	283	27	24	22	20
歯学部	136	82	15	12	7	6
薬学部	471	290	0	0	5	4
工学部	2,259	1,320	62	48	38	31
農学部	288	173	6	6	9	6
獣医学部	161	99	7	7	0	0
水産学部	8	5	0	0	0	0
教養部	31,450	19,641	465	433	1,566	1,347
医療技術短期大学部	270	163	0	0	3	3
教員	19,273	478	1	1	25	20
院生	415	244	111	106	58	53
職員	720	472	19	14	37	35
学外者	49	29	89	86	30	24
合計	61,425	26,494	921	841	1,969	1,692

昭和 60 年度 教養分館分類別館外貸出統計

類別	0	1	2	3	4	5	6
冊数	1,160	3,162	494	4,006	5,340	18,974	1,459
類別	7	8	9	文庫・新書	雑誌		合計
冊数	1,528	12,691	4,867	6,529	1,215		61,425

「附属図書館利用規程」を制定

本学附属図書館の利用者サービスの向上等を図るため、開館時間、休館日、資料の貸出し等の取扱いを改めるとともに、図書館の利用に係る取扱いを整備し、教養分館の利用に係る取扱いを含めて一元的に規定するため、従来の「閲覧規程」を廃止し、新たに下記の利用規程が制定された。

北海道大学附属図書館利用規程 (昭和61年9月24日)
(海大達第22号)

(趣 旨)

第1条 北海道大学附属図書館(教養分館を含む。以下「図書館」という。)の利用については、この規程の定めるところによる。

(利用の資格)

第2条 図書館を利用することができる者は、次に掲げるものとする。

1. 北海道大学(医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。)の職員
2. 本学の学生(研究生及び聴講生を含む。)
3. 本学の名誉教授
4. 北海道大学附属図書館長(教養分館にあつては、教養分館長とする。以下「館長」という。)が許可した者

(利用証)

第3条 図書館を利用する者(以下「利用者」という。)は、あらかじめ、図書館利用証(以下「利用証」という。)の交付を受け、利用の際に必ず携行しなければならない。ただし、利用者が本学の学生であるときは、学生証をもって利用証に代えるものとする。

(開館時間)

第4条 図書館の開館時間は、次のとおりとする。

平日 午前時から午後5時まで

土曜日 午前9時から午後0時30分まで

2. 図書館本館開架閲覧室並びに教養分館開架閲覧室及び一般閲覧室(1階に限る。)については、前項の規定にかかわらず、本学における春季、夏季及び冬季の休業日で館長が別に定める日を除き、平日は午後8時まで、土曜日は午後4時30分まで開館するものとする。
3. 前2項の規定にかかわらず、館長が必要と認めたときは、臨時に開館時間を変更することがある。

(休館日)

第5条 図書館の休館日は、次に掲げるとおりとする。

1. 日 曜 日
2. 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日
3. 12月25日から翌年1月4日まで
2. 前項に規定するもののほか、館長が必要と認めたときは、臨時に休館することがある。

(閲覧室資料の閲覧)

第6条 図書館が所蔵する図書、雑誌その他の資料(以下「資料」という。)のうち、各閲覧室に備付けの資料は、それぞれの閲覧室において自由に閲覧することができる。

(書庫内資料の閲覧)

第7条 書庫内の資料は、所定の閲覧室において閲覧することができる。

2. 前項の規定により閲覧することができる1回の閲覧冊数は、5冊以内とする。

(入庫検索及び閲覧)

第8条 本学の職員、名誉教授、大学院学生その他館長が適当と認める者は、書庫内に入庫して、資料の検索及び閲覧をすることができる。ただし、大学院学生については、図書館本館を利用する場合に限るものとする。

2. 書庫内に入庫して資料を検索し、又は閲覧することができる時間は、次のとおりとする。

平日 午前9時から午後4時40分まで

土曜日 午前9時から正午まで

(資料の貸出)

第9条 資料は、次に掲げるものを除き、貸出しを受けることができる。

1. 参考図書
2. 新着雑誌及び未製本雑誌
3. 貴重図書
4. 視聴覚資料
5. その他館長が指定したもの

2. 前項の規定により貸出しを受ける場合の貸出冊数及び期間は、別表のとおりとする。

3. 貸出しを受けた資料は、他人に転貸してはならない。

(研究室等貸出)

第10条 前条の規定によるもののほか、部局等の研究室、資料室等においては、特定の資料の貸出しを受けることができる。

2. 前項の規定により貸出しを受けることができる資料の範囲、貸出手続等については、館長が別に定める。

(貸出資料の返却)

第11条 資料の貸出しを受けている者が、利用の資格を失ったときは、当該貸出資料を速やかに返却しなければならない。

2. 館長が必要と認めるときは、貸出期間中であっても、貸出資料の返却を求めることがある。

(参考調査)

第12条 図書館においては、利用者の依頼に応じて、学術情報の提供及び文献の調査を行うものとする。

(相互利用)

第13条 図書館においては、利用者が他の部局等の図書室等を利用する場合又は他大学の図書館等を利用する場合のあっ旋を行うものとする。

2. 他大学の図書館等から図書館の利用申込みがあった場合は、館長が支障ないと認める範囲で、これに応ずるものとする。

(文献複写)

第14条 図書館においては、利用者の依頼に応じて、教育、研究又は調査を目的とした資料の複写（以下「文献複写」という。）を行うものとする。

2. 文献複写については、北海道大学附属図書館文献複写規程（昭和41年海大達第15号）及び北海道大学附属図書館文献複写料金規程（昭和41年海大達第16号）の定めるところによる。

(閲覧個室等の利用)

第15条 利用者が、閲覧個室、演習室、視聴覚室その他館長の指定する施設を使用しようとするときは、あらかじめ、館長の許可を受けなければならない。

(汚損等の届出義務等)

第16条 利用者が、資料を汚損若しくは紛失したとき、又は機器その他の設備を損傷したときは、速やかに館長に届け出なければならない。

2. 資料又は機器その他の設備を汚損、紛失又は損傷した者には、弁償を求めることがある。

(利用の制限)

第17条 利用者が、この規定に違反したときは、図書館の利用を制限することがある。

(雑則)

第18条 この規程に定めるもののほか、図書館の利用に関し必要な事項は、図書館委員会（教養分館にあっては、分館委員会とする。）の議を経て、館長が別に定める。

附 則

1. この規程は、昭和61年9月24日から施行する。
2. 北海道大学附属図書館閲覧規程（昭和41年海大達第10号）は、廃止する。

別表(第9条関係)

利 用 者	図 書 館 本 館			教 養 分 館	
	貸出冊数	貸 出 期 間		貸出冊数	貸出期間
		図 書	雑 誌		
教 官 及 び 名 誉 教 授	100 冊以内	90 日以内	15 日以内	3 冊以内	10 日以内
大 学 院 学 生 及 び 研 究 生	50 冊以内	60 日以内	15 日以内		
教 養 部 ・ 学 部 学 生 及 び 聴 講 生	10 冊以内	15 日以内	15 日以内		
教 官 以 外 の 職 員	10 冊以内	30 日以内	15 日以内		

備 考

1. 図書館本館の開架閲覧室に備付けの資料については、この表にかかわらず、貸出冊数は5冊以内とし、貸出期間は15日以内とする。
2. 第2条第4号の規定により館長が許可した者に係る貸出冊数及び期間は、その都度館長が定める。
3. 記録、古文書等の貸出しその他この表によりがたいものについては、その都度館長が定める。

◆ 電算化ニュース

北海道地区図書館電算化実地研修を実施

本学図書館オンラインシステムは4月1日より稼働を開始し、大半の日常業務は電算化処理に切り換えられた。地区内各国立大学においても、電算化に移行すべく具体的に準備が進められているが、先行館としての本学において、電算化基幹要員として必要な知識を体得するための実地研修が行われた。

研修は、6月から8月までの3カ月間、当館学術情報課において実施され、地区内大学から佐藤貞司(北教大)、藤田隆(室工大)、久田貢(北見工大)の3氏が参加した。

研修内容は、北大システムの解説、実際に機器・端末を操作しての各種作業、学情センターへの目録データ入力、プログラム作成実習等、自館に戻ってからすぐに役立つ、実務的な研修を中心に行なわれた。特にプログラム作成実習では、自大学所蔵雑誌目録の作成プログラムと同時に、地区所蔵雑誌総合目録のプログラムを完成させたのは大きな収穫といえよう。

この研修は、地区内の要望があれば来年以降も引き続き実施する予定である。

運 用 部 会 報 告

図書情報システム運用部会

第7回 昭和61年8月7日(木)

議 題

1. キーボードおよび操作法について
2. キリール文字キーボードの処理について
3. 図書DB削除作業について
4. 図書データ入力に係る「協同作業日」について
5. 書誌・所在情報のチェック作業について

雑誌情報システム運用部会

第7回 昭和61年7月23日(水)

1. 外国雑誌契約業務の進め方について
2. 運用の手引きの作成について
3. 購入和雑誌の受入れファイルの作成状況について
4. 和雑誌等の支払いについて
5. 寄贈雑誌の受入れファイル作成について
6. 雑誌所蔵目録について
7. 製本システムの運用について
8. システムの改善要求について

電 算 化 記 録 (2)

昭和61年6月～9月

年月日	事 項	年月日	事 項
61.6.2 ～8.30	道地区「図書館電算化実地研修」研修員として、佐藤(北教大)、藤田(室工大)、久田(北見工大)の3氏来館。3カ月間学術情報課で研修	61.7.3	上級プログラム講習会
61.6.9	学術情報センターより、「利用申請書」本館継続分の承認(4月23日付)受領	61.7.7	学情課、目録掛、研修員からなる作業班による、学情センターへの業務用入力開始(8月まで、毎週月曜のみ)
〃	上級プログラム講習会	61.7.10	上級プログラム講習会
61.6.10	〃	61.7.17	〃
61.6.11	〃	61.7.21 ～8.2	書庫内資料の、登録(物品)番号での貸出、返却処理テスト
61.6.12	〃	61.7.22 ～29	日本電気フィールドサービスにより、学内全端末の点検作業
〃	学術情報センターより、「利用申請書」新規分14館・室の承認(5月20日付)受領	61.7.23	第7回雑誌情報システム運用部会
61.6.13	上級プログラム講習会	61.7.24	上級プログラム講習会
61.6.16	〃	61.7.28	VT出力もPWSS出力に統一、部局担当者への説明会
61.6.17	〃	〃	日本電気と、今までの「障害連絡票」と「仕様変更書」を総点検
61.6.18	〃	61.7.31	上級プログラム講習会
61.6.19	〃	61.8.1	日本電気との定例打合せ会議(第20回)
61.6.20	日本電気との定例打合せ会議(第19回)	61.8.7	目録担当者中級講習会
61.6.20,26	目録データ入力説明会	〃	第7回図書情報システム運用部会
61.6.25	各部局担当者により、外国雑誌契約データ確認作業	61.8.8	午後、工事関係者の不手際で停電事故(3回目)
〃	新規利用申請が承認された14館・室の「コード配置届」と「担当者登録申請書」を学術情報センターに送付	61.8.14	午前、落雷の影響で瞬間的停電事故(4回目)
61.6.27	第7回道地区図書館業務機械化開発専門委員会(学内図書掛長を含めて、「北大オンラインシステム」の概要説明とデモを実施)	61.8.19	「ケース2」について、学情課、目録掛等の関係者により詳細な内容検討会
61.6.28	閲覧業務オフライン処理のため、電算機室OP1台を3階カウンター側に移設	61.8.20	上級プログラム講習会
61.6.29	第3回図書情報サービス研究大会(於、札幌大)で、杉田事務官が「北大オンラインシステム」について発表	61.8.21	日本電気の担当SEと、「ケース2」について詳細な打合せ
61.6.30	「目録データ入力説明会」受講者を対象に補修講習	61.8.22	図書館将来計画委員会(山田学情課長「北海道大学図書館オンラインシステムについて」と題し、電算化の現状、今後の問題点を約1時間説明)
		61.8.25	7月から始めた「目録作業班」による学情センターへのデータ入力作業一応終了、9月からは目録掛中心の新体制で入力の予定

年月日	事 項	年月日	事 項
61.8.28	上級プログラム講習会	61.9.11	上級プログラム講習会
〃	「図書館業務電算化実地研修」閉講式	61.9.12	道地区私立大学図書館協議会「北大システム」見学(8大学より28名)
61.8.29	第29回道地区大学図書館職員研究集会(遠図書館専門員「北海道大学図書館オンラインシステムの開発経緯と現状」を報告)	61.9.18	日本電気との定例打合せ会議(第21回)
61.9.3~5	学術情報センター「目録講習会」に、岡田(経)、高橋(医)2事務官出席受講	61.9.19	全学図書担当掛長会議(10月1日付けで、システム設計実施部会委員を上級プログラム講習受講者と交替する件を了承)
61.9.3	雑誌データベース説明会	61.9.25	上級プログラム講習会
〃	杉田事務官「洋雑誌検索語切り出し」予備プログラム完成、4日より実用化	〃	新旧システム設計実施部会引き継ぎ
61.9.4	LAN概算要求に関する関係部局の懇談会	61.9.25~26	NEFSにより、学内全端末キーボード取り替え
61.9.11	簡略書誌ファイルへの資料番号登録についての打合せ会議	61.9.26	第5回所在情報システム運用部会

データベース登録件数

(昭和61年10月1日現在)

	図書(書誌件数)			雑誌(純タイトル数)			雑誌 延タイトル 合計	備 考
	和	洋	計	和	洋	計		
附属図書館	2,305	1,649	3,954	1,273	824	2,097	2,255	分館、法学部、教養部、言語文化部、大計センターを含む 附属病院を含む 〃 演習林、農場を含む 図書は図書館で入力
文学部	279	289	568	112	461	573	584	
教育学部	494	125	619	248	195	443	468	
経済学部	475	169	644	200	265	465	469	
理学部	250	486	736	118	741	859	1,097	
医学部	212	231	443	149	712	861	1,116	
歯学部	70	32	102	166	237	403	476	
薬学部	117	17	134	68	109	177	196	
工学部	397	343	740	271	807	1,078	1,552	
農学部	451	130	581	287	610	897	1,229	
獣医学部	23	41	64	130	216	346	371	
水産学部	344	51	395	154	250	404	533	
低温研	148	15	163	245	207	452	456	
応電研	4	1	5	29	128	157	164	
触媒研	6	129	135	13	57	70	70	
免疫研				10	54	64	65	
スラブ研	2	157	159	30	146	176	176	
環境科学研究科	29	2	31	49	114	163	164	
医療技術短大	238	1	239	134	46	180	181	
計	5,844	3,868	9,712	2,747	4,718	7,465	11,622	

(注記) 図書は書誌件数なので、整理冊数はこれより多い。

◆ 受贈図書

本学教官著作物

〔本館〕

○名誉教授

羽丹貴知蔵(共著) 青少年へ贈る言葉 わが人生論 大阪編(上) 文教図書出版 1986

朝比奈 英 三 エンシロチョウ 北海道大学図書刊行会 1986

石川 純 人間はなぜ歯を磨くか 医歯薬出版 1986

○文学部

杉田 聡(訳) 定言命法～カント倫理学研究～ H. J. ペイトン著 行路社 1986

永井秀夫(編) 北海道民権史料集 北海道大学図書刊行会 1986

河内祥輔 古代政治史における天皇制の論理 吉川弘文館 1986

○法学部

五十嵐 清 法学ガイド 3. 民法I(総則) 日本評論社 1986

○医学部

小林 博 楡との対話 北海道大学図書刊行会 1986

○医療技術短大

高橋正明(共著) リハビリテーション医学講座 第17巻 循環器疾患/呼吸器疾患 医歯薬出版 1986

◇ 人事往来 ◇

○図書館委員会

今西順吉	文学部助教授	61.4.1
狩野陽	教育学部教授	〃 (再任)
神谷正男	獣医学部助教授	〃
中井英基	教養部助教授	〃
津川良太	言語文学部助教授	〃
荒又明子	触媒研究所助教授	〃
菅野盛夫	医学部教授	61.4.21 (再任)
高木徹	水産学部教授	61.5.1 (〃)
鵜飼隆好	工学部教授	61.6.1
山下格	医学部教授	61.9.16 (再任)

○退職

小野寺理佳 閲覧課参考調査掛 61.5.15

○採用

米澤澄江 閲覧課参考調査掛 61.5.16

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻70号)

1986年10月31日発行 発行人 酒井 豊

編集委員 遠 昭二(長)・久原秀志(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・藤島 隆(医)・岡田 深(経)
宇野洋子(理)

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561